

からだは一つ、洗礼は一つ

【第16回日本伝道協議会公開講演】

からだは一つ、洗礼は一つ

大 住 雄 一

[1] 日本基督教団における聖礼典の混乱

(1) 「からだは一つ、洗礼は一つ」

表題の言葉を含むエフェソの信徒への手紙 4:1-6 は、「すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられる」唯一の神が、イエス・キリストを主と告白する一つなる信仰によって、私たちをキリストの体である一つなる教会に連ならせ、すなわち私たちを一つなる希望へと召し、互いに愛し合うものとして下さったのだと告げる。私たちが一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ち、愛をもって互いに忍耐しあうのは、まことに主にあって、互いにひとつなる体に連なるものだからである。また私たちは全てのものの満たされたキリストの体の一部であるゆえに、それぞれに与えられた分を謙虚に果たすならば、同じ体の他の部分を生かすこととなり、そのようにして一人ひとり、キリストの体全体を立てあげる不可欠な部分として生かされる。そして、主にあって私たちが一つの体につながれていることの印は、一つなる洗礼だと言われているのである。

「洗礼」に「一つ」という言葉が結びつくのは、以前、わたしにとってむしろ意外なことであった。洗礼は個人的な決断の問題だと思っていたのである。もちろん洗礼とは、主とわたしの一对一の逃れようのない関係であって、他人事ではない。信仰告白は自分の口で告白するのである。しかし「わたし自身の救い」と言って、自分の救いを大事にしているうちに、自分だけの、自分の思

い通りになる「イエス様」を作り出していなかっただろうか。たとえば、どの牧師からいかなる影響を受けて洗礼を授かったか、それはたしかに、受洗に至る経過を証して主を讃美するためには大事なこともかもしれない。しかしわたしの先生、わが意を得たりというようなことを言ってくれる先生を自慢する者になっていないだろうか。この先生だったから洗礼を受けたのだと（一コリント 1：10-17）。しかし私たちは、歴史の中に一回限りおいでになったナザレのイエスの名によって救われた。この名の他に私たちを救い得る名は誰にも与えられていない（使徒 4：12）と言われる、そのナザレのイエスの名によって洗礼を受けたのである。それゆえ、「洗礼は一つ」。わたしだけの信仰告白、わたし（だけ）の「イエス様」など、ありはしない。私たちは、今一度、自分一人だけの特別な信仰なるものを打ち砕かれて、唯一の主の御前に立つ者になりたい。そして、この一つなる洗礼に多くの人を招くのが伝道であろう。

しかしこの一つなる洗礼は、教会の歴史において常に分裂の危機にさらされてきた。今日、日本基督教団においては、分裂どころか崩壊の危機にある。

(2) 問題の概要

今日、日本基督教団で、聖餐を未受洗者にも配るべきだと主張する教師があり、そのような聖餐式を実行している教会がある。未受洗者にも配餐する聖餐式あるいはそれを行うことを「フリー聖餐」あるいは「無差別配餐」と呼ぶ。受洗未受洗の区別なく聖餐に与らせるというのは、何を主張しようとしているのか。それらの主張は全く誤りだと言わなければならないが、どの点がなぜ誤りであるのか。その誤りが私たちの信仰にとっていかに深刻な問題であるか、そして私たちはどうすればよいのか。本講演ではこれらのことを明らかにしたい。そのようにして、しかしそれならば教会は、何によって一つであるのかを再確認したい。

実は同じ主張が、無差別配餐だけではなく、たとえば接手を受けていない補教師が聖礼典を執行してしまうという問題にも現れているので、より広い範囲の問題を見渡す必要がある。ただ未受按者の聖礼典執行は、世の中の結婚式場

からだは一つ、洗礼は一つ

の「牧師」が偽物だったというのと同断で、教職論などという問題ではない。「教団は認めていないが自分たちは資格ありと思っている」、などということは、外の人に対しては通用しない、詐欺的と言うべき行為だと思う。

また「フリー聖餐」は、変装することがある。未受洗者とくに子供の参加する礼拝において、聖餐式と変わらないことを「愛餐」と称して行い、あるいは「パンさき」と言ってパンだけを配ることがあるようだ。名前を変えても、実はこれこそが「真の」聖餐式だと主張されているのであり、「聖餐式とは呼ばないから未受洗者でも与ることができる」と言う限り、やはり偽りである。

幼児陪餐について言えば、宗教改革者たちは、幼児洗礼を受け入れつつ幼児陪餐は慎重に避けた。神の恵みは私たちの信仰より先にあって、私たちは先にある神の恵みゆえに神を信じ、救われる。だから両親の信仰によって、幼子に彼ら自身の信仰告白に先立って洗礼を施し、これを恵みのなかに受け入れるということは正しい。しかし聖餐は、弱い私たちの信仰をくりかえし確かめるものであるから、その意味が分からなければ受ける意味もない。それなら、幼児の陪餐は避けた方がよいということである。意味が分からなくても、それを受ければ利益があるというのでは、容易に偶像崇拜に陥る。もちろん、日本のルーテル教会のように、信条において一致している（全体）教会が、教会として幼児陪餐を認めるということはある得る。またローマ教会のように堅信礼の前に初聖体に与るという順序もあり得る。しかしいずれの教会でも、幼児洗礼を受けて特定の年齢に達した者に対して施されるべき、聖餐に与るための準備教育が定められており、幼児たちに、幼児受洗の有無を問わず聖餐を開いてしまったわけではない。

さて、聖餐に与ることを受洗者に限るべきではないという主張は、いわゆる教団紛争の中で顕在化してきたものと考えられる。それまでの世の中を支えてきた価値を解体せよという、当時世界中に広まっていた学園紛争に共鳴する人たちが教団の中にも現れ、自分たちの信奉するイデオロギー、時代思潮＝「わたし（だけ）のイエス」に教会を従わせようとした。そのためにキリストの権威を否定し、法秩序の破壊を善とした。聖餐式をフリーにすることも破壊活動

であって、キリストの体を立てるという発想はない。牧師や信徒の中に、こうした破壊に共鳴する人もかなりいて、問題は難しくなった。

もっとも、実は教団外でも、とくに各個教会主義の教会の中に、「フリー聖餐」を行っているところがある。しかし本講演では現在の日本基督教団の問題に限り、教団の法である教憲教規の事に即して論じる。教団の法については、法には従わねばならないと言うだけではなく、なぜこれは守らなければならないのか、なぜそのように規定したのかを考える。

(3) 未受洗者に配餐しようとする誤った主張の要点

未受洗者に配餐しようとする人々の主張は様々で、「ああ言えばこう言う」といった感がないでもないが、要点は、以下 1) 2) のような二つの方向に分けられる。

1) サクラメントの効力と信仰の有無

まず一方に、「サクラメントは信仰に先行する」という主張がある。主張の表現は様々だが、「礼拝に来た人には、信仰の有無にかかわらずパンとぶどう酒が差し出されるべきである」と言われ、「聖餐は全ての人に差し出される救いを形に表したものだから、形から入門し、これに応答して洗礼に至るという順序がありうる」と論じられる。これを主張する人たちの多くは、未受洗者に陪餐させるといっても、洗礼を否定しているわけではない。聖礼典を形式に過ぎないものと見ているが、それにもかかわらずサクラメントの効力ということを考える。もっとも、この人たちの言う「効力」は、せいぜい教育的効果に過ぎない。それでも、その効力が信仰の有無にかかわらず受領者に及ぶと主張していることになる。しかし、受領者の信仰に関係のないサクラメントの効力を考えるのは、宗教改革者たちの最も警戒した偶像崇拜に陥ることである。

この第一の主張において、いかにも宗教改革者に学んだことのように「全ての人に語る説教もサクラメンタルであり、聖餐もこれと異なるところはないのであるから、聖言を聞いた者は全て聖餐に与る」と言われることがある。宗教改革者たちが説教と聖礼典を、神の言の二つの現れとして並べたのはたしかで

からだは一つ、洗礼は一つ

ある。しかし見える御言葉と見えない御言葉は慎重に区別され、両者が混同されることはなかった。

2) 洗礼の有無と信仰の有無

もう一つの方向は、「洗礼の有無は信仰の有無と一致しない」と主張する。ここでは明らかに、洗礼が無意味化する。いわく、「問われるべきは真実の信仰であって、洗礼を受けたかどうかではない」。また最近の「ありのまま」信仰と結びついて、「救いとはありのまま受け入れられることであり、罪の悔い改めは必要ない」と言われ、「悔い改めのバプテスマ」は、神の救いの証印としての意味を持たなくなる。同じ「ありのまま」信仰から、「無資格者と共にいたイエスの食卓に学ぶのが聖餐である」、「イエスは洗礼の有無を、食卓につく資格として求めたことはなかった」などと主張される。さらに、キリストの贖罪と解放が社会問題の解決に解体されてしまい、「(社会)問題を共に担う人たちこそが、ふさわしい陪餐者である」という主張が現れてきている。

言うまでもなく、1) と 2) は互いに矛盾する。1) は聖餐に与るのに信仰はいらないと言う。ただ、聖餐によって信仰に入り、洗礼に至るという筋道を許容する限り、洗礼は無意味化されない。これに対して 2) は、洗礼を受けていようがいまいが、真実の信仰をもって聖餐に与るべきだと言う。必要なのは信仰であって、洗礼ではない。それゆえ、かえって洗礼は無意味化する。ところが、この信仰と洗礼の関係において正反対の両説を、「フリー聖餐」を正当化できれば理由は何でもよいとばかりに、しばしば同一の人が主張する。

しまいには彼らは開き直って、「教団の教憲教規は、陪餐者は受洗者に限ると明言していない」、また「教団の式文には未受洗者は受けることができないとは書いてない、自分は式文のままやっているのだ」と嘯く。しかしもちろん、式文がそのことを言わないのは当然の前提だからで、彼らはそれをことさら言わないことによって、式文のままと言いながら式文に書いてないことを行なっていることになる。つまり彼らは、未受洗者から聖餐を受けてよいかどうかを質問されれば、式文に書いてないのに、未受洗でも受けてよいと答えるはずで

あって、「式文のまま」というのは、けっして式文のままではない。

さて、未受洗者への配餐を主張する人たちが無視している決定的な前提がある。それは、唯一にしてひとつなるキリストの体、神の民としての教会である。

[2] 唯一にしてひとつなるキリストの体、神の民としての教会

(1) ことがらの二つの側面

「フリー聖餐」を主張する人たちに無視されている前提には、二つの側面がある。内的な一致の側面と、異質なものの排除の側面である。

第一に、前述のように、私たちが唯一にしてひとつなるキリストの体に連なり、神の民のひとりになるのは、洗礼によるのである。それは洗礼によって私たちが、罪人であるこれまでの自分に死に、キリストと共に神に生きるものとなるからである（ローマ 6：1-14）。すなわちキリストと共に神に生きるとは、ひとつなるキリストの体に属するものになることであり、ゆえに、洗礼も「一つ」であると言われねばならないわけである。こうした教会の内的一致は、前述の教団の教憲教規や式文にも、この問題をめぐって議論の対象とされる聖書箇所においても前提とされている。ところがこの前提を彼らは無視する。それゆえ、彼らの聖書解釈も法解釈も、最初から歪んでいると言わざるを得ない。

第二に、キリストの体に連なるということは、これまでの自分に死ぬという全面的な信頼（回心）を要求され、魂も身もキリストのものになるわけであるから、当然、他の「体」に連なることを拒絶することにもなる（一コリント 6：12-20, 10：14-22）。「フリー聖餐」を求める人たちはこの排除的側面を、他者あるいは他宗教の存在を否定するキリスト教の排他性を表すものとして嫌悪する。それは、洗礼によって自分がキリストのものになるということを拒絶しているのである。しかし、このキリストとの排他的関係を拒絶して残るものは、「フリー聖餐」を主張する人たちが信奉するイデオロギー、時代思潮というものである。唯一のキリストを拒絶して、イデオロギーという「わたしのイエス」を絶対化し、いわば偶像崇拜に陥るのである。つまり、たとえば彼らは「問題を担う人たちと共に」と言うが、キリストを信じる信仰とは別の基準を

からだは一つ、洗礼は一つ

設けて、その基準にそぐわない者を、やはり排除しているわけである。キリスト者が2000年、否、キリストにあって私たちが接ぎ木されているイスラエルからすれば4000年の歴史を貫いて、命を懸けてきた「主の名」に対して、これは姦淫を犯すことではないだろうか。

(2) 合同教会の一致の基盤

教会が唯一にしてひとつなるキリストの体たる神の民であることは、地上の教会においてはいずこにおいても、すでに前提とされていることであると同時に、そこへ向かうべき目標でもある。ところで真の教会が形成されるには、聖餐論の一致が不可欠である。しかし日本基督教団は、さまざまな聖餐論を有する諸教会の合同教会であり、しかも、聖餐論について合意ができたから一つの教会になったというわけでもない。教団は聖餐論の一致に向かうために、合同の最小限の合意を教憲教規に定め、あとは自由な討論で、十分な時間をかけて一致を求めることとして出発したのだと言ってよい。

自由な討論に必要な根本的な信頼関係として、聖餐論が違っていても、互いにキリストのからだである神の民の一員として認め合い、重荷を負いあえるのは、何によってか。一致にむかうそうした信頼の基盤として、教憲教規は、神の民への所属の基準、すなわち信徒の基準を明らかにした。この出発点の最小限の合意は、決して、内容のない、ただ人を縛るだけの規則ではない。

まず教憲第10条に、日本基督教団という教会の構成要素として「信徒」を規定している。すなわち、「本教団の信徒は、バプテスマを受けて教会に加えられた者とする」。教団という教会の信徒となる基準は、洗礼を受けることである。実際には、洗礼式は教団に属する各個教会で行われ、各個教会に加えられることをもって、教団所属の信徒とするのである。

法というものは規定の順序が大切であって、教団ではまず教憲第10条が信徒を洗礼によって定義し、そののち教規第6章が信徒を陪餐会員と未陪餐会員に区別する。そうすると、陪餐会員というものは、洗礼を受けて教会に加えられているのが前提であって、洗礼を受けていない「陪餐者」を認めるのは、この

前提を覆し、合同の基本的信頼を破壊することになるのである。

教規第6章は、教憲の信徒の定義を受け取って、各個教会のレベルで信徒を規定して行く。教憲第10条は、各個教会への所属をもって教団所属とするが、各個教会への加入は、会員名簿への登録をもって行うこととしたのが、教規第134条である。「信徒とは、教会または伝道所に所属し、その会員名簿に登録された者とする。」

つづいて第135条が、洗礼を受け（て教会に加えられ）た信徒を、陪餐会員と未陪餐会員に分ける。「信徒は、陪餐会員及び未陪餐会員に分けて登録しなければならない。ただし、未陪餐会員のない教会ではこの限りでない。」

ところで、「未陪餐会員のない教会」というのは、幼児洗礼を認めない教会のことであって、幼児陪餐を認める教会のことではない。というのは、幼児陪餐を認めたとしても、幼児洗礼を受けて直ちに陪餐できるわけではなく、ある程度年齢が進み、あるいは陪餐のための教育を受けてから許されるわけで、幼児洗礼を認める教会には、必ず未陪餐会員は存在するものだからである。

そこで第136条が、陪餐会員を定義して言う（ここで未陪餐会員のない教会の規定が、幼児陪餐を容認するものでないことは、いよいよ明らかになる）。「陪餐会員とは、信仰を告白してバプテスマを領した者、または未陪餐会員で堅信礼または信仰告白式を了したものを言う。」また第138条は未陪餐会員の規定である。「①未陪餐会員とは、幼児で父母の信仰に基づきバプテスマを領し、まだ聖餐に陪しえない者をいう。②前項の会員は、堅信礼または信仰告白式を領した後陪餐会員となることができる。」

さらに、各個教会の教会規則に規定がある。もともと成文規則を持たない教会も教団に加わっているが、そうした教会では法的な処理を要する事柄があれば、教団の教会規則（準則）に従うことになる。また、独自の教会規則を持っている場合も、準則の最低限の基準を踏み越えた規則を持つことはできない。準則第2章に、やはり「信徒」の規定がある。第5条「この教会の信徒は、バプテスマを受けてこの教会に入れられた者、および転入会を承認された者をいう」。そして、決定的なのは第8条である。「①聖餐にはバプテスマを受けた信

からだは一つ、洗礼は一つ

徒があずかるものとする。②幼児バプテスマを受けた者は、信仰告白式をおえるまでは聖餐にあずかることができない。」また第11条「聖餐にあずかる資格のある信徒を陪餐会員、聖餐にあずかる資格のない信徒を未陪餐会員とする。」

教会の法を考えると重要なことであるが、法は、人が何によって拘束されるかを示す時、同時に、それ以外のものによって拘束されることはないということをも示しているのである。教団の場合、信徒は正典・信仰告白および教憲教規以外の要求には従う義務はない。聖礼典の破壊は、聖礼典から人々を「自由」にすることにはならず、別の要求で縛ることになる。

(3) エキュメニズムの基盤

1) 「リマ文書」の読み方

「フリー聖餐」を主張する人がよく引用して、これが世界的な傾向だと言う世界教会協議会の1982年の『洗礼・聖餐・職務』という文書がある。「リマ文書」と呼ばれる。ここには、しかしその人たちの主張とは裏腹に、きわめてはっきりと、洗礼こそが一致のしるしだと言っている。洗礼における一致を前提として、洗礼で一致した諸教会が、聖餐の本質論の違い、方式の違いで一致できないことを問題とするのである。まず洗礼による教会の一致を、次のように明確に位置づける（『洗礼・聖餐・職務』日本キリスト教協議会信仰と職制委員会・日本カトリック教会エキュメニズム委員会編訳、教団出版局）。

「バプテスマは主にたいする服従のうちに執行されることによって、キリストの弟子たることの共通のしるしあるいはその保障〔保証？ 引用者〕の封印となる。バプテスマによってキリスト者たちは、キリストとの一致、キリスト者相互の一致、また時と所をこえて普遍的である教会の一致へとみちびかれる。私たちに共通するバプテスマは、信仰において私たちがキリストとひとつにむすびあわせるのであるが、この意味においてバプテスマは一致をもたらす根本的な結び目なのである。こうして私たちはひとつの民であり、世界のあらゆる所で、またそれぞれが置かれているその場で、同じ一人の主を告白し、彼に仕えるようにと召し出されている者なのである。」（リマ文書 1/1/D,6）

「フリー聖餐」を主張する人たちは、この洗礼の項目を無視して、たとえば次のような文を引用し、WCCは未受洗者を聖餐にあずからせる方向に向かっていると言う。

「ひとりの主の食卓にあずかることによってひとつの民となったこの聖餐をまもる集団は、そこに見えるかたちで共にあずかっている人々が形成している集まりを心にとめていなければならない。」(リマ文書 2/1/E, 26)

この発言が「フリー聖餐」を志向するものだと主張する人々は、ここでもやはり、決定的な前提を無視している。WCCのエキュメニズムが「教会」一致運動であるという前提である。教会を外した世界の一致のための運動ではない。当然、「そこに見えるかたちで共にあずかっている人々が形成している集まり」とは、他の信条に属する教会（の人々）のことであって、洗礼を受けていない人々のことではない。「リマ式文」が、聖餐論の展望の中に被造物全体を入れ、キリスト論よりも創造論の中で感謝の応答を強調しているとしても、それは無差別配餐を意味しない。むしろ、感謝や宣教の主体として、洗礼によって一致する教会を、はっきりと位置づけており、未受洗者はその主体にはなっていない。

2) 宣教協約の主体の確立と信頼関係

エキュメニズムの場面として、教会間の宣教協約というものも考えなければならない。協約を成り立たせる教会間の理解と一致の基盤として、双方の（告白）主体の確立と、誠実がなければならない。ところで、2004年2月8日に在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協約20周年記念礼拝があった。この協約を改めて読み直してみると、その中心にあるのは、在日韓国人に対する「戦争責任」の表明である。しかしその第三項には、教職の交換条項がある。教職の交換条項は、協約の起草者からすれば、あまり真剣に考えていない、教会間協約にはあるのが普通だから付け加えたという程度のものかもしれないのだが、本来、協約の両当事者が互いに相手を教会と認めて受け入れることを表す決定的な規定である。教団内で聖餐式執行の秩序を乱す教職が多いということは、この条項の前提を壊すことになり、在日大韓基督教会への背信になる。

からだは一つ、洗礼は一つ

戦争責任を表明しておきながら、責任の主体を自ら破壊しているのである。

[3] 聖書解釈の問題

(1) 「イエス」の教えとは何か

「フリー聖餐」支持者は、聖書に未受洗者の陪餐を禁じる章句はない、と主張する。果たしてそうだろうか。彼らの「解釈」は、先に結論があって、その結論を否定するような章句はないという程度のものであるが、いくつか、彼らが用いるテキストについて、彼らの解釈が不可能だということを述べたい。

さて、彼らの主張のなかには、第一に「史的」イエスに遡ろうとし、「本来の」イエスの意図から聖餐式のありかたを規定すべきだというものがある。たとえば受洗者のみの陪餐は古カトリック教会に由来し、イエスの教えを枉げているというのである。しかし正典および基本信条を通して見るのでない「イエス」とは何か。はたして、そのようなものを聖書から抽出することができるのだろうか。実はありもしないものを「再構成」し、自分の主張に合致する「イエス」を作り出しているだけではないか。

また「フリー聖餐」を支持する学者の中に、「カノン イム カノン（正典中の正典）」を読み取ることを主張するものもある。しかし、「カノン イム カノン」とは、信仰義認の証言こそが正典を正典たらしめているとするルター派的正典論において、その証言の中心的テキストを、そう言うのである。ところが「フリー聖餐」の支持者は、信仰義認という教理的前提を無視し、用語だけを濫用して、彼らにとって都合の良い言葉を選んでいると思われる。

さてそれならば、主イエスは、洗礼を受けているか否かに関わらず、すべての人にパンを与えたと考えるべきであろうか。マルコによる福音書 6:30-44, 8:1-9, すなわち主イエスが五千人、また四千人を養ったもうた記事は、集まってきた人全てを、洗礼の有無を問わずに養ったということだろうか。

「フリー聖餐」の支持者は、「聖餐式においてイエスの食事を再現するのだ」と主張し、「イエスは食事に罪人たちを招き、洗礼を受けているか否かを問わず、すべての人にパンを与えたのだ」と言う。しかしその聖書解釈において、

実はキリストの神性を切り捨ててしまい、そこに集められたのが「神の」民であるという前提を無視しているのではないか。

主イエスがイスラエル全体を家族とし、異邦人を救いに入れたもうたことは、確かである。五千人を養われた記事における百人×五十人の隊列は、集められたのが単なる群衆ではなく、組織しうる民であったことを示す（現状は羊飼いのない羊群のようであるとしても）。十二の籠に集めたパンくずは、イスラエルの十二部族を指し示す（マルコ 6：30-44）。また四千人を養う話は、五千人に対して尻すぼみに見える。主イエスがすべての人にパンを与えようとしたのなら、この漸減的な順序は相応しくない。しかし四千人とは、世界の四方すなわち全世界を表すと言われる。七つのパン、七つの籠に集めたパンくずというのは、使徒言行録の、ギリシャ語を話す人々の代表たる七人の執事や、黙示録の七つの燭台との類比をみることができるとすれば、世界の教会あるいは異邦人を象徴するかもしれない（マルコ 8：1-9）。またこの二回目の食事の前に異邦の女が「パンくず」を求めたことも象徴的である（マルコ 7：24-30）。そうではあるけれども、この全世界を包む食事に参加したのは、割礼を受けた（しかも、もしかしたら、悔い改めてヨハネの洗礼を受けていた）神の民イスラエルであった。神の民イスラエルこそが、世界の祝福の担い手だったからである。私たちは洗礼によって、この担い手に加えられたのである。

はたして主イエスは、全ての人にパンを分けよと命じたもうただろうか。第一に、主が命じたもうたのは洗礼を授けることであって（マタイ 28：19）、全ての人を聖餐に与らせることではない。使徒たちもこれを受け継いでいる。聖霊降臨の時、「わたしたちはどうしたらよいのか」と問う同胞たちにペトロが答えたのは、「悔い改めよ、そしてイエス・キリストの名によって洗礼を受けよ」ということであった（使徒 2：38）。そうすれば罪赦され聖霊の賜物を受ける。全ての人に向けられているのは、この約束である。こうして洗礼を受け、仲間になった人々が、ともにパンをさいた（2：42）。

からだは一つ、洗礼は一つ

(2) パウロが要求した「ふさわしさ」

しばしば主張されるのは、コリントの信徒への手紙一11：17-34について、「パウロが要求した『ふさわしさ』は信仰者が自ら問うべきことであって、未受洗者を排除しない」というようなことである。ここでも彼らは、問題になっているのがキリストの体に連なる者の一致であって、個人の「ふさわしさ」ではないという前提を、全く無視している。

つまりここに言う「ふさわしさ」は、キリストの体に属する者が、同じキリストの体の他の肢体を軽んじていないか（11：17-22）、すなわち教会の一致をないがしろにすることにより、キリストのからだと血とを犯して（11：27）いないかを問うのである。問題は、洗礼を受けてキリストの体の一部とされている者同士の一一致である。それゆえ、キリストの体に属していない者が聖餐に与っているという事態は、初めから排除されているのであって、「問題にされていないから許容されている」などという「理屈」は成り立たない。

ところで29-30節に、「主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです」と言われている。このような裁きが語られることは、文脈の中でやや唐突に思われるし、病気や死が、主の体のことをわきまえずに飲み食いしたことの裁きだというのであれば、それは、病者への差別的発言ではないだろうか。しかし、飲み食いにおいて同じ体に属する他者のことを慮ることが言われているのだと考えると、意味が分かる。コリントの信徒への手紙一は全体として、キリストの体の一致を壊すものは何であるかを論じ、一致のためには、自らの自由や強さを犠牲にすることを求める（8：1-13, 9：19-27, 10：23-33その他）。そしてこの自由や強さは、きわめて具体的な、体の事柄なのである。自由や強さを誇って一致をないがしろにする者は、キリストの体における生命の共有から自らを切り離しているのだ。それゆえ彼らの自由や強さの主張とうらはらに、「弱い者、病人、死んだ者」がいる。すなわちこの裁きに関する言葉は、自ら誇る者に対する反駁として、誇るような結果はもたらされていないと言うのである。

(3) パウロの船上での食事

使徒言行録27：33-38によれば、難船したローマ行きの船上で、パウロは未信者である同船者たちを励まし、彼らと共に「パンを割いた」ように見える。しかし、この記事で注意すべき点は、パウロは決して聖餐の要件を備えた食事をしておらず、また皆とパンを分け合ったわけでもないということである。

第一に、「パンを取り、感謝してさく」というのは、キリスト者の普通の食事の仕方にすぎず、最後の晩餐でキリストの行いたもうたことを再現しているわけではない。第二に、パウロはそのように感謝して皆に配り始めたのではなく、一人で食べ始めた。それを見た人々が元気づいて食事をしたのである。

(4) 過ぎ越しの食事

ちなみに、過ぎ越しの食事は、完全に神の民だけの食事、無割礼の他国人に対しては「閉じられた」食事である。過ぎ越しは、家族毎に守る食事であって（出エジプト記12：3）、不特定の群衆が行う食事ではない。家族で祝うようにして、他国人の参加を除外する。また、過ぎ越しの子羊の骨を折ってはならないとされている（ヨハネ福音書19：36、出エジプト記12：46）。その意味は、宗教史的にはいくつかの可能性が考えられているが、少なくとも出エジプト記12：46においては、子羊の一部が外に持ち出されないためである。持ち出されて他国人の手に渡らないように、骨を折ってはならないのである。この規定はまさに、無割礼の者の「陪餐」を明確に禁じる 出エジプト記12：43-49の中に置かれている。

[4] 牧会的・伝道的問題

(1) 悔い改めの問題

聖餐を受洗者に限るべきでないという主張の根底には、悔い改めというものを拒絶する「思想」があると思われる。悔い改めの拒絶は、実は、自己存在があるがままに受容しあるいは主張するという、世界的に広がった考え方と結びついている。教会にも、あるがままの受容が救いであるという理解が蔓延して

からだは一つ、洗礼は一つ

いる。さらに、「悔い改めの要求は、植民地主義的な改宗の強要につながる」と主張する人たちがいる。

しかし悔い改めとは何であろうか。悔い改めとは、自分の主人（所有者）の変更である。自分自身が自分の主人ではなくなり、自分の属する国の支配者が主人なのでもなく、キリストが自分の主人であり所有者であるという者になることが悔い改めである。それが同時に救いの内容であり、真実の慰めである（ハイデルベルク信仰問答第1問）。それゆえ、自分がなお自分の主人として自分を責めるのは、悔い改めではない。むしろ途方に暮れて、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのか」（使2:37）と言うほかないのが、悔い改めの第一歩である。わたしたちはどうしたらよいのか。この問いに使徒は、「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」（使徒2:38）と答えたわけである。

ところで、悔い改めは心の中だけでなく、体も、キリストの所有になることである（ローマ10:9-10、ハイデルベルク信仰問答第1問）。洗礼を受けなくても、心の中で信じていればよいのではないかと考える人は多い。しかし洗礼を拒絶することは、自分をキリストに明け渡せないでいるわけで、その躊躇こそ共に解決せねばならない。悔い改めと洗礼を飛び越してしまうのは、この躊躇を無意味化し、信仰に入ろうとする求道者を、入口で謝絶することになる。

また、悔い改めを受容し、洗礼を授けるのは教会の業である。日本基督教団信仰告白にも、「教会は、……バプテスマと主の晩餐とを執り行い……」とされているとおりである。

（2）真実の信仰について

洗礼を受けたかどうかではなく、真実の信仰があるかどうか問われるという主張があるわけであるが、これへの反論として、四つのコメントを付す。

〔コメント1〕受洗者であることと信仰者であることを分離するのなら、陪餐にふさわしい「真実の信仰」あるいは「理解と信仰」とは何であるか。「理解と信仰」の有無をだれが判断するのか。「本人が判断して聖餐に与ろうとす

るなら、未受洗者だからと言って拒むべきではない」と主張するのもかもしれない。しかし、聖餐を受けるときにそのようなものが備わっているかどうか、自分で言える人がいるのだろうか。そのような判断は、本人にはできない。それゆえにこそ洗礼がある。もし聖餐に招かれている人から洗礼を受けたという事実を外してしまったら、自分に信仰があると判断して聖餐桌に進み出ることのできる人はだれもなく、かえって、「理解」が全くないがゆえに、与えられるまま食べる人ばかりの聖餐式になる。

「無資格者こそイエスの招きの対象であった」と言われるが、「資格」を判断するのはキリストなるイエスであり、キリスト以外にない。洗礼は、まさにその判断が人間から出たのではなく、キリストが「信仰あり」としてくださったことの証印であって、もちろん印だから、受けていない人が直ちに天国に行けないということにはならないが、陪餐「資格」を自分のうちに持ちえない私たちが、それにもかかわらず、主がよしとして下さっていることを確信するよりどころとなる。

洗礼というのは、本人が教会の信仰告白のことばを告白したということをもって十分の前提とするのであって、どの程度の理解と信仰があるのかは、まさに「教会の信仰を告白して洗礼を受けたいと志願する程度」でよしとするのである。その告白は血肉から出たのではなく、聖霊の導きによって、イエス・キリストに導かれて行われたものだとして、教会が信じて、洗礼を施す。それ以外の何ものをも問わないし、それ以下に敷居を低くすることもしない。そのこと以上に、洗礼そのものの「資格」であることが主張されたことはない。洗礼は「無資格者」の救いの印にほかならない。

〔コメント 2〕「本当の信仰」なるものをもって「キリストの現臨に与る」ことができるのなら、聖餐から洗礼へという順序どころか、洗礼も聖餐も必要ない。このように個人の信仰に救いの土台を置きうるとする思想は、無教会主義に徹底するもので、それなら、儀式はみな拒否したほうがよい。

陪餐を受洗者に限るとしても、その範囲については教会間で一致がないと言う。まさにそのとおり。そして、この点で一致できなければ、別の教会が立て

からだは一つ、洗礼は一つ

られなければならない。聖餐式を未受洗者にも差し出したいなら、賛同者を集めて新しい「(無)教会」を立てるべきである。ここまで「教団の信仰」を批判しておいて、なお教団にとどまっているというのは、この問題について、まことに不真面目と言うほかない。

〔コメント3〕「聖餐はキリストの愛がすべての人に開かれていることの印であり、洗礼は、私たちの応答の印である」という奇妙な論理がある。しかし、キリストの愛がすべての人に開かれていると言うなら、洗礼が定められていることこそ、その印である。主の伝道命令は「洗礼を受けよ」であって、それは「わたし(キリスト)の弟子とする」ことと区別されていない(マタイ28:19-20)。それゆえ使徒たちも、「わたしたちはどうしたらよいのですか」と問うた同胞たちに、「悔い改めて洗礼を受けよ」と答えた。洗礼を受けた人が聖霊を受け、仲間になったわけで、「仲間になった」ことが救いである。その仲間たちがパンを裂く交わりをした(使徒2:37-42)。順序は逆ではない。これらのテキストを、イエスの意図とは違う教会の言葉だと言うとすれば、もはや聖書を議論の土台にはしていないということである。

むしろ聖餐が応答であって、「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせる」のである(1コリント11:26)。

〔コメント4〕パウロが常に問題としたのは、同じ一つのバプテスマを受けた兄弟姉妹の一致についてである。「パウロは洗礼を重んじなかった」とか、「受洗を陪餐のふさわしさにしなかった」というような奇妙な主張の「論拠」とされる第一コリントに一貫しているのも、同じ課題である。「一つの体となるために洗礼を受けた」(12:13)兄弟姉妹が、たとえば、だれから洗礼を受けたか、生活において自由になったか、豊かになったかなどによって分裂していくことを、「主の体に対して罪を犯す」ことだと言っているのである。主の体における一致は、ひとつなる洗礼にあらわされる。第一コリントの全体が、洗礼を前提として語られている。

(3) その他、今考えておくべき牧会的・伝道的問題

「聖餐式は招きだ」と言う人がある。たしかに、全ての人が聖餐式に与ってほしい。しかし聖餐式そのものの意味は、招きではない。それは信仰告白であり、私達が信仰によってキリストのものになるということである。伝道の教会であった初代教会の人々が、なぜ聖餐を、閉じられた集会の中で守ったか。宗教改革者達が幼児洗礼を認めながら、そして幼児陪餐については最後まで悩みながら、なぜ幼児陪餐を避けるに至ったか。なぜかを考えねばならない。

たしかに色々な事情があつて、信じる気持ちがあつても洗礼を受けられないでいる人がある。洗礼をためらい、それゆえ聖餐も受けないでいる人が、ただちに滅びに定められるとは思われない。しかし洗礼を受けることができないでいる人にとって、聖餐にあずかるということは、もっと難しいことであるはずなのである。なぜなら、聖餐によってキリストのからだの一つになるのであり、洗礼によってそうなるよりももっと深く、教会の一員と認められるのであるから。洗礼は受けられないけれども聖餐なら受けられるというのは、洗礼の意味も聖餐の意味も全く知らされていないのだ。

しかし、なにか障害があつて洗礼を受けられないでいるならば、その障害を取り除くのが牧師の仕事であろう。主は「洗礼を授けよ」とお命じになり、「信じて洗礼を受けるものは救われる」とお約束になったのだから、障害は必ず取り除いてくださる。

あるいは、「聖餐式で『排除』されることが、求道者の躓きになる」と言われる。しかしこれは、私の考えでは、幻に脅えているだけである。私の知るかぎり、聖餐式を受けさせてもらえなかったから躓いて、教会に来なくなった人は一人もいない。教会に来なくなるのは他に理由がある。むしろ私達は、初めて教会に来た一人一人に、洗礼と聖餐の意味を丁寧に説明すべきである。共に聖餐に参加できるようになるまで、まわりにいる信徒が、そして何よりも牧師が、一緒に歩いて行けばよい。洗礼と聖餐について、初めから丁寧に説明すること、その人の悩みや、教会に来た理由をよく聞いて、一緒に歩いて行くこと、洗礼に至るまでにある障害を取り除くこと、あるいは一緒に乗り越えていくこ

からだは一つ、洗礼は一つ

と、それらのことをしていたら、聖餐式をフリーにする必要はない。

聖餐式をフリーにすることで傷つくのは信徒たちである。「教会で議論をして」決めたとしても、フリーにしたらいられなくなる信徒たち（他に行き所がなければ、教会に来なくなるか、疑いを抱きながらしかたなく来続ける）がある。フリーにすることが否決されても、教会員の間に分裂が生じたわけだし、反対した人は「伝道ということがわかっていない人」、「いずれわかる（わからねばならない）人」というレッテルを貼られる。また一度フリーにしてしまうと、正しい形に戻すときに新たに傷つく人が生じる。これは教会にとって、信徒一人一人にとって悲劇である。

「意味がわからなくても形式から入ればよい」というのは、実は偶像崇拝的な考え方で、これがいかに教会を誤らせるかということは、宗教改革前夜の教会の歴史を見ればよくわかる。宗教改革者達が、パンとぶどう酒の意味を徹底的に論じたのは、そうした偶像崇拝と戦うためであった。そして、パンとぶどう酒の意味をどう見るかによって、どのように聖餐にあずかるのが相応しいのかが違ってくるのである。フリーにすることを主張する人にとって、パンとぶどう酒の意味は、それほど大きな問題になってない。

「キリストの恵みは全ての人に差し出されており、聖餐式はそのことを表わすのだから、まず全ての人に（未信者にも）差し出されるべきである」と言われる。「それを受けるか受けないかはそれぞれの人の自由だ」と。一見、筋がとおっているように見えるが、それならば、聖餐を受けることが何を意味するかを、よくよく教えて差し出すべきである。確かに救いは全ての人に差し出されている。救いを受け取ろうとする人は拒絶されない。しかし聖餐をフリーにすると、これを受けることが、キリストと一つになること、キリストのものになることであるということを知らずに受けてしまうことになる。それを知っていたら、洗礼を受けたくない人は、聖餐も受けたくないだろう。それをとるかとらないかを自分で判断する時間も知識もなく、漫然と、いや、しかたなく受けることになる。信じない人も、疑いながら聖餐を受けるようになる。

全体教会ということを考えると、ある個教会が聖餐をフリーにすれば、それ

はその教会だけの問題ではなく、教団という一つなる教会の聖餐式に、一つ穴があいたことになる。一つの教会で聖餐式をフリーにすれば、他の教会が閉じた聖餐式を守っていることは、愚かなことになる。閉じられた聖餐式を守っている者も、いやおうなしに、しかも正規の手続きにもよらずに、開かれた食卓に与らされることになる。聖餐式をフリーにしたかったら、教団を離れて、新しい教派を形成すべきである。

「聖餐式をフリーにすることで、もっと真剣に、聖餐とはなにかを考えてもらえる」と言う人もある。しかしなぜ、そのためにフリーにしなければならないのだろうか。

「こだわりのあるまま聖礼典を執行してはいけない」と言って「フリー聖餐」に踏み切る人もある。しかし、伝統が間違っていると論証できて言っている人はいない。ただ、こうも言えるから、そのようにしていいのだという程度の議論である。その程度の理由しかないのなら、自分の意志よりも伝統に従うのが牧師の良心というものである。教会の教えに従うという信頼に基づいて牧師に任じられたのだから。むしろ、信仰と聖礼典について、その教会（教団）に従えなくなったら、その教団の牧師を黙って辞めるべきである。

聖餐式の問題は教会の生命にかかわることで、聖餐式を本質的に新しいものに変えるということは、新しい教会を作ることである。自分の牧会は自分で決めると言うけれども、問題は、一人の牧師の良心では決められないことがらを含んでいる。

(4) 受洗者だけの陪餐は「教会の差別体質」をあらわすか。

おしまいに、「教会には差別体質があり、聖餐を受洗者に限るとするのは、その典型的な例である」といった主張について、一言申し上げる。教会の差別的体質と言われるものが、本当に受洗者だけの聖餐式に象徴的に現われているのか。個別的な議論なしに体質論を言われると、対話の糸口がなくなってしまうが、私は、受洗者だけの聖餐式が、教会の差別体質なるものと結びつくとは思わない。差別という問題を言うなら、むしろ、ひとつなるキリストのからだ

からだは一つ、洗礼は一つ

に連なるという信仰告白によってこそ、一人一人の差別体質があばかれ、悔い改めを迫られるものである。そして私たちは、自分の信仰心の強さによらず、ただ神が我々の中に信仰を見いだしてくださったことによって救われている。その証印として、洗礼を重んじているのである。

(おおすみ ゆういち)